

授業の中で扱わなかった定理 5.2.1 の証明について説明する。

この定理は、基底の取り替えに伴う表現行列の変化に関するものだった。\$U, V\$ をベクトル空間、\$T: U \to V\$ を線形写像とする。また、

$$E = \{u_1, u_2, \dots, u_n\} \text{ と } E' = \{u'_1, u'_2, \dots, u'_n\} \text{ を } U \text{ の基底,}$$

$$F = \{v_1, v_2, \dots, v_m\} \text{ と } F' = \{v'_1, v'_2, \dots, v'_m\} \text{ を } V \text{ の基底}$$

として、\$E\$ から \$E'\$ への基底の変換行列を \$P\$、\$F\$ から \$F'\$ への基底の変換行列を \$Q\$ とする。すなわち、第 3 回 (10 月 20 日, 教科書 4.2 節) で導入した一次結合の記法を用いて

$$(u'_1, u'_2, \dots, u'_n) = (u_1, u_2, \dots, u_n)P, \quad (v'_1, v'_2, \dots, v'_m) = (v_1, v_2, \dots, v_m)Q \quad (1)$$

であるとする。

**定理 5.2.1** 上の状況で、線形写像 \$T: U \to V\$ の基底 \$E, F\$ に関する表現行列を \$A\$ とし、基底 \$E', F'\$ に関する表現行列を \$B\$ とすると

$$B = Q^{-1}AP$$

が成り立つ。

また授業でも口頭で述べたように、定理 5.2.1 の特別な場合として、線形変換に対する定理が得られる。すなわち線形変換 \$T: V \to V\$ に対して、\$E = \{u\_1, u\_2, \dots, u\_n\}\$ と \$E' = \{u'\_1, u'\_2, \dots, u'\_n\}\$ を \$V\$ の基底とし、\$E\$ から \$E'\$ への基底の変換行列を \$P\$ とするとき、次が成り立つ。こちらも納得しておいてください。

**定理 5.2.2** 上の状況で、線形変換 \$T: V \to V\$ の基底 \$E\$ に関する表現行列を \$A\$ とし、基底 \$E'\$ に関する表現行列を \$B\$ とすると

$$B = P^{-1}AP$$

が成り立つ。

では証明しよう。

[定理 5.2.1 の証明] 初めに表現行列の定義を確認する。

$$T(u_j) = (v_1, v_2, \dots, v_m)a_j, \quad T(u'_j) = (v'_1, v'_2, \dots, v'_m)b_j \quad (j = 1, 2, \dots, n) \quad (2)$$

とするとき、\$A = [a\_1 \ a\_2 \ \dots \ a\_n]\$, \$B = [b\_1 \ b\_2 \ \dots \ b\_n]\$ であった。式 (2) はまとめて

$$(T(u_1), T(u_2), \dots, T(u_n)) = (v_1, v_2, \dots, v_m)A,$$

$$(T(u'_1), T(u'_2), \dots, T(u'_n)) = (v'_1, v'_2, \dots, v'_m)B$$

と書き表すことができる。

次に、\$F\$ から \$F'\$ ではなく逆の取り替えを表す行列、すなわち \$F'\$ から \$F\$ への基底の変換行列を求めておく。この行列を \$Q'\$ とすると \$(v\_1, v\_2, \dots, v\_m) = (v'\_1, v'\_2, \dots, v'\_m)Q'\$ だから、(1) の第 2 式と合わせることで

$$(v_1, v_2, \dots, v_m) = (v'_1, v'_2, \dots, v'_m)Q'$$

$$= (v_1, v_2, \dots, v_m)QQ'$$

が得られる。ところが、\$F\$ から \$F\$ 自身への基底の変換行列は単位行列 \$E\$ だから、\$QQ'\$ は \$E\$ に等しい。したがって \$F'\$ から \$F\$ への基底の変換行列 \$Q'\$ は、\$Q\$ の逆行列 \$Q^{-1}\$ に他ならない。(これで同時に、基底の変換行列が一般に正則行列であることもわかった。)

このことを用いて、線形写像  $T$  の基底  $E', F'$  に関する表現行列を次のように計算できる。最初の等号だけは非自明なので後から説明する。

$$\begin{aligned} (T(\mathbf{u}'_1), T(\mathbf{u}'_2), \dots, T(\mathbf{u}'_n)) &= (T(\mathbf{u}_1), T(\mathbf{u}_2), \dots, T(\mathbf{u}_n))P \\ &= (\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_m)AP \\ &= (\mathbf{v}'_1, \mathbf{v}'_2, \dots, \mathbf{v}'_m)Q^{-1}AP. \end{aligned} \tag{3}$$

したがって  $T$  の基底  $E', F'$  に関する表現行列  $B$  は  $Q^{-1}AP$  に等しい。

さて、(3) の最初の等号の成立についてだが、これは次のようにしてわかる。基底の変換行列  $P$  が (1) の第 1 式で与えられることを思い出そう。この式は、 $P = [p_1 \ p_2 \ \dots \ p_n]$  とおけば

$$\mathbf{u}'_j = (\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n)p_j$$

であることを意味する。さらに  $P = [p_{ij}]$  とすれば

$$\mathbf{u}'_j = p_{1j}\mathbf{u}_1 + p_{2j}\mathbf{u}_2 + \dots + p_{nj}\mathbf{u}_n$$

である。ここで  $T$  が線形写像であることを用いると

$$T(\mathbf{u}'_j) = p_{1j}T(\mathbf{u}_1) + p_{2j}T(\mathbf{u}_2) + \dots + p_{nj}T(\mathbf{u}_n)$$

すなわち

$$T(\mathbf{u}'_j) = (T(\mathbf{u}_1), T(\mathbf{u}_2), \dots, T(\mathbf{u}_n))p_j$$

が得られる。これを書き換えたものが (3) の最初に現れる等式である。 □

---

なお、10月20日の授業で「定理 4.2.4, 4.2.5 は 5.2 節で使うのでその際に説明する」と言いました。使っているのはまさにこの証明においてです。  $QQ' = E$  や  $B = Q^{-1}AP$  を結論するために、厳密に言えば定理 4.2.5 (ないし問題 4.2.6) が使われます。

でも、この点については気にしないでけっこうです。定理 4.2.4, 4.2.5 の説明も省略することにします。よくわからないが気になるという人は質問に来てください。